

自己評価報告書(最終報告)

報告者

生活・健康系コース
(保健体育)／廣瀬 政雄

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

第2次世界大戦以後、日本人の寿命は飛躍的に伸びて、男女を通じた平均寿命は世界一である。日本人の平均寿命の伸長には政策的に実施された国民皆保険制度と医療の進歩によるところが大きいと考えられるが、これと相まって、日本人の健康観および健康に関する各種の情報に対する態度あるいはこれに裏打ちされた健康行動によるところも大きいと考えられる。なぜなら、医療水準が高いレベルにあり、知識と情報に満たされている国は少なくないにもかかわらず、特に、日本人において平均寿命の伸びが顕著なためである。日本人の健康観(日本人が健康に関してどのように向き合ってきたか)を知ることは、実践的で効果的な健康教育を行う上で有用な知見となることが期待できる。そこで、近代において日本人が健康および健康情報に関してどのように向かい合いかつ記述してきたかを、近代の文学に現れる場面における健康観を通して研究する。

2. 点検・評価

診療の間の時間にできて、教員養成大学の授業に役立つ研究をと考えて、第二次世界大戦後、平均寿命を飛躍的に伸長させた日本人の健康観を、文学や評論など各種の記述から研究した。まず、2008年から現在までのインターネット上に報道される報道各社の700編近いニュースを分析した。各社は、主に医学各分野のトップジャーナルに掲載された論文の中から、非常に学術的なものから実用的なものまで報道していた。健康に関する情報は人々により取捨選択されながら、徐々に多くの人に行き渡り、健康レベルの向上に役立つようになって考えられた。このような報道姿勢と取捨選択および情報の拡散のされかたにおいても、日本人の健康観および健康情報に対する姿勢が反映されることが考えられるが、どのような研究にすれば科学研究のレベルに引き上げることができるか模索した。次に、文学書においては、健康問題をひとつの話題としてストーリーを展開しているが、登場する主人公の健康観は描かれているものの、悩みや苦悩に重点が置かれているものが多く、日本人の健康観の定番としてというよりも主人公の考え方を描出する手段としてとらえられている。日本人の健康観は、いわゆる日本人論とも重複するとも考えられ、これをどのように科学研究とするか模索した。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

本学の建学の理念にうたわれた大学院の定員は、本来、現職教員でもって3分の2を占めることになっている。従って、定員を満たすためには大学から各都道府県に教員の派遣を要請するのが本来の筋道である。しかしながら、現職教員の派遣は派遣元の各都道府県の予算状況のみに依存すると言っても過言ではないことが、大学院定員充足のために何らかの取り組みを行わなければならなくなった原因である。

大学院受験者数はわが国の経済状態、特に就職の状況に依存する。大学卒業生の就職状況が奮わなければ、大学院が就職できなかった学生の受け皿となって受験者数が増加することになる。幸か不幸か、ここ数年は学生の就職状況がはかばかしくなく、本学を受験する学生数は以前より多く、定員以上の合格者数を出している。しかしながら、入学手続きをしない学生が多いことが問題で、定員を充足できない結果となっている。

一方、学部生の応募は、教員採用率が全国一位となったことにより、入学試験の競争倍率にみられるように、全国的に高いレベルにある。大学院において入学を拒否する学生が多い理由は、本学の地理的条件が悪いことに一因があることは明らかであるが、学部生の入学希望者が地理的条件の悪さを克服していることを考えると、大学院においても入学辞退者を減少させることは可能のように思われる。

本学の大学院で学ぶことの明らかな利点として、教育と研究環境を整える点も重要であるが、大学院生の入学目的を考えると、学部生と同様に教員採用率の高さを打ち上げることが、より大きいインパクトになることが期待できる。本学に勤めて10年の間に、教員になってほしいと思った学生よりも教員になりたいとより強く望んだ学生が学力の裏打ちを得て就職していった例をより多くみてきたが、授業や指導を通じて「就職」という「人參」に強く反応する精神状態(意識)を育むことが有効だと考えられる。

個人的な勧誘は限界もあり継続性に欠けるが、兼業先の大学生のなかで本学を希望する学生がいる場合には、本学の特徴を丁寧に説明するようにしている。

2. 点検・評価

健康教育の合間に、教員採用試験に合格して夢を達成することや一般社会人として自立することの大切さ、あるいは成績向上と一般的な試験突破の秘訣などを話し、教員採用試験に向けた意欲を引き出すように指導した。

徳島文理大学4年生の一人が、来年度、本学大学院を受験したいということで、本学の事情をたずねてきたので、専門職大学院について丁寧に説明し勧め、教務課にも受験の情報を得るように勧めたところ、受験・合格し入学した。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

1. 学生の授業評価を授業の改善に生かす。

これまで、本学の学生の特徴に合わせた授業を行うため、勉強しやすい教材を作成し、興味を引き出すような楽しい授業を心掛けてきたが、受け手の学生の側においても授業を楽しみながら役立つと感じているという評価が年ごとに増加してきた。学生の授業評価を参考にした取り組みに対する評価と考えられる。

2. 教材の改定と充実を図る。

教材として用いるテキストの改定と完成していないテキストの充実を図る。websiteに執筆中の「健康手帳」を授業に取り入れるなどして、授業内容の多様化をはかる。

3. 学生に対しては、定期健康診断を実施し、目標を持った学生の夢と希望が達成されるように健康面での指導を心がける。身体面と心理面で心身健康センターを受診あるいは相談に訪れる学生には、病気治療だけでなく体のしくみや病気の原因について説明し、教員になった後も児童生徒の健康指導に役立つような実践的な指導を行なう。

2. 点検・評価

1. 学生の授業評価は肯定的であった。特に、大学院生の評価が高かった。

2. 本学の学生の特徴を基に、より教育的効果を高めるための教科書を執筆・製本した。それらは、学部学生用の「子どもの保健」「子どもの心身保健」および大学院生用の「健康科学研究」である。授業にとり入れた「健康手帳」は授業内容を膨らませ多様化することに有用であった。

3. 学生を対象とした定期健康診断を実施し、学生がスポーツと勉学に取り組むためのサポートを行った。

4. 本年度には、夏に急性腹痛などの重症患者が発生したが、病院を紹介するなど適切に対応した結果、緊急手術などにより回復した。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

1. 心身健康センターの所長として、心身の健康と保健管理の実際の活動から得られる有意義な医学的知見について研究する。
2. 状況が許せば科学研究費を申請する。
3. 文学に表現された場面から、「近代における日本人の健康観および健康情報と健康行動」について研究する。

2. 点検・評価

1. 2008年から2012年9月の間にウェブ上に報道された健康情報700報を収集し、現代日本人の健康情報の質と傾向を分析し、教員養成大学における授業内容として取り入れる際の有用性について検討した。授業内容とすることに関して、本学の大学院生が内容を完全に理解することは困難と考えられたので、わかりやすい解説を加えて授業に用いたところ、非常に有用だとの印象を持った。その結果を本学紀要に投稿した。
2. インターネット中毒の若者や一部の若年女性が転倒などにより容易に骨折するなど、生活習慣と骨密度の関係が問題になっている。そこで、本学学生の生活習慣や運動習慣・運動履歴と骨密度の関係について、学部生の卒業研究として研究・指導した。
3. 科学研究に相当する研究テーマを模索したが、研究中のテーマを発展させる余裕がなく、申請を断念した。
4. 日本人の健康観と健康情報について研究し、得られた内容を部分的に本学website「健康手帳」に掲載した。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

1. 医師として学生と職員の日常診療に当たる。また、診療に当たって、病気の原因と治癒のしくみおよびその後の健康の増進に関する指導を行なう。
2. 学校医として、学生の心身の健康管理を行う。
3. 産業医として、学内の労働安全衛生環境の確保に貢献し、職員の健康の維持と増進の活動を展開する。
4. 心身健康センター所長として、学生のニーズに応じた利用しやすいセンターのあり方を検討する。
5. 所属する委員会(学生支援委員会、倫理委員会)の委員として大学の運営に貢献する。
6. 大学の諸活動において救護担当者として参加する。

2. 点検・評価

1. 医師として、学生と職員の診療を行い、健康に関する指導を並行して行った。
2. 学校医として、学校保健安全法に基づいた学生の心身の健康管理を行った。
3. 産業医として、労働安全衛生法に基づいた職員の心身の健康管理を行った。
4. 看護師と協力して、受診と管理が容易な健康診断システムを構築した。
5. 所属する委員会(学生支援委員会、臨床研究倫理審査委員会)の委員として活動した。
6. 大学の諸活動において、救護活動に参加した。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

1. 附属学校の職員に対する定期健康診断、特殊健康診断および肝炎感染防止事業、および病気休業後の復帰支援などを通じて、健康面での支援を行う。
2. 外国人学生の本学での医療と健康面での指導を通じて、勉学と研究を側面から支援し、国際交流に貢献する。

2. 点検・評価

1. 附属学校の職員に対する定期健康診断、特殊健康診断、肝炎感染防止事業および病気治療後の復帰支援などを通じて、健康面での支援を行った。
2. 外国人学生は本国とは異なる環境での心身の健康問題を起こしやすい。日本人に対するのとは異なる支援が必要であった。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

1. 学生の勉学やスポーツおよび職員の業務の遂行に滞りが生じないように、定期健康診断と事後措置および心身の健康に関する日常診療を通じて、学生と職員の心身の健康を支援した。
2. 学生の中に、(特に外国人留学生)経済的な問題で病院を受診するのをためらう場合があり、これらに対しても丁寧な診療と説明による指導を行い、早期の回復をはからせることができた。
3. 心身健康センターは、法律に規定された業務を遂行することが義務づけられているが、医師としての役割を果たすことが本学に対して最も大きい貢献であると考えている。